

福島県災害ボランティアセンター通信

赤い羽根共同募金 

ホットな福祉情報紙

はあふるふくしま 別冊

「福島県災害ボランティアセンター通信」は、「赤い羽根災害等準備金」で作成しています。被災地の復興と被災者の方のサポートを行う災害ボランティアの活動と、今すぐ役立つ情報や取り組みを皆様にお伝えする情報紙です。県内の災害ボランティアセンターなどで配布されます。(月二回程度)ご感想・ご意見は右記宛お寄せください。

Vol.24 2012年3月19日発行

発行: 社会福祉法人 福島県社会福祉協議会
福島県災害ボランティアセンター
〒960-8141 福島市渡利字七社宮111番地
福島県総合社会福祉センター1F
TEL024-522-6540
FAX024-522-6546
<http://www.pref-f-svc.org/>



特集
第3回いわき
サンシャインマラソンを
支えた2,110人の
ボランティア

来てくれてありがとう! 走ってくれてありがとう! ランナー、ボランティア、観客を 一つにした復興祈念マラソン



▲10キロ一般男子のスターターを務めた有森裕子さん。大会には、増田明美さん、箱根駅伝で活躍した地元出身の柏原竜二選手もゲストとして参加



参加賞等配布ブースでは、高校生が大活躍

第3回いわきサンシャインマラソンが2012年2月12日に開催されました。今年は、県内外から過去最多となる6,785人の市民ランナーが参加。2,110人のボランティア、約5万人の観客も一体となって大会を盛り上げました。大地震と津波でコースが被災したことから開催が危ぶまれた時期もありましたが、一つになって力強く進んで行ける目標がほしいという地域の皆さんの声と協力、全国各地から届く熱いエールを力に開催にこぎつけました。

いわき市を支えてくれた人々への恩返しも込めた応援の大漁旗がはためく中、ゴールした選手に感想を伺うと「完走を目標に走り込んできました。達成感でいっぱいです」(大塩健一さん・白河市)、「初参加で無事ゴールできました。またがんばれそうです」(鈴木美都子さん・いわき市)、「風がきつい日でしたが、ボランティアと応援の皆さんの元気な声に励まされてゴールできました」(山本竜太さん・青森県)など、笑顔で答えてくださいました。

毎回、ランナーから高い評価を受けているいわきサンシャインマラソンの魅力は、駐車場、接待、受付、給水所などに分かれて大会をサポートし続けるボランティアにあると言っても過言ではありません。「第1回から個人、まちづくり協議会、企業の方々、それぞれが自分たちが支え育てる大会だと思ってくださっていて、毎年、マニュアル以上のおもてなしをしてくださいます。今大会を総括するようなことば『来てくれてありがとう。走ってくれてありがとう』も、そこから生まれたように思います」と赤津俊一さん(いわき市)。

▲いわき鍼灸師会のランナーサービスブース。きサンシャインゴール後にケアをしておくその後が楽

マラソン実行委員会)。今回、仲間3人で荷物係を担当した鈴木拓弥さん(大学2年)は、「復興の力になりたくて参加したのですが、逆に元気をもらいました」と話し、クラスメイトと一緒に参加賞引換ボランティアを担当した石井陽菜野さん(高校1年)は、「自分にできることで大会を応援したいと思いました。震災直後の海岸沿いは、見渡す限り瓦礫でした。全部片づけて今日を迎えられたことにも感謝です」と語りました。何かを成し遂げるとき困難はつきものですが、目標に向かって進みながらそれぞれに心と体を鍛え、次の困難を乗り越える強さを蓄えたことは確かです。達成感と感謝を胸にいわき市は、力強い一歩を踏み出しました。

▲救護班として医師、看護師、救急救命士など125人が救護に当たりました



I LOVE FUKUSHIMA

福島県各地に、全国から様々な形の応援が寄せられています! そんな頼れる皆さんからのメッセージをお伝えします。



▲「来年も参加します」と笑顔で語る東日本国際大学の仲良し3人組

東洋大学陸上競技部監督
酒井 俊幸さん
(埼玉県在住)



東洋大学陸上競技部には、多くの福島県出身者がいます。こうして陸上を続けられることに、チーム全体で改めて感謝した1年でした。「陰日向ない努力を」。これは私が福島で母校の高校教員をしていた頃、先輩から教えられ大切にしている言葉です。大学陸上競技部の監督となった今、日々厳しい練習を重ねる選手たちにも繰り返し伝えていきます。1日も早い復興に向けて前に進んでいこうとする皆さんの姿を、1秒を削り出すために少しでも前へ進もうとする選手たちの姿に重ね、ひたむきな努力で前を追う走り続けていくチームでありたいと思います。

福島へのラブレター



東洋大学陸上競技部(前主将)
柏原 竜二さん
(千葉県在住)

昨年夏、帰郷した際にふるさとを歩き、被災地を初めてこの目で見ました。18歳になるまで過ごし、育ててもらった福島のために、進学して故郷を出てからもたくさんの励ましをいただいた福島のために、自分にできることは、たった一つしかないと思いました。それは一瞬でも、皆さんがつらいことを忘れ夢中になってしまうくらい走りを見せること。ひとりの人間として、アスリートとして、これから多くの人々に勇気と元気を伝えられるよう走り続けていきたいと思っています。